

I. 以下の文章を読んで、次の問1～問6に答えなさい。

「あの人は教養がある」という言い方をする場合、私たちはたいてい、いろいろなことを幅広く知っている人、自分の仕事以外のことにも関心があり、読書量が豊かで、どんな話題にも合わせられるだけの知識をそなえている人のことをイメージしている。たとえば情報産業の最前線で活躍する企業人が、ふと「モンテニューも言ってますけど、人間とは、おどろくほど(ア)空しく、変わりやすく、うつろいやすい存在ですよ」などといってみせたりすると、私たちは率直に「ああ、この人は教養があるな」という印象を抱く。逆に自分の専門とする分野のことにいくら精通していても、それ以外の話題にまったく疎い人物のことを「教養人」と呼ぶ者はまずいない。『源氏物語』については生き字引のように詳しい国文学研究者が、うっかり「TPP ってなんですか」などと口走ろうものなら、世間知らずの専門バカ呼ばわりされるのが(イ)関の山だろう。

こうしてみると、「教養人」の条件としてまず要求されるのは、複数の分野にまたがるバランスのとれた知識をもっていることであるといえそう。しかしながら、単に多くの知識を所有しているというだけで「教養がある」といえるわけではない。たとえばテレビのクイズ番組には信じられないほど博学な人がしばしば登場するけれど、彼らは「物知り」ではあっても、必ずしも「教養人」とあるとは限らない。いろいろなことを知っているということは、「教養人」であるための必要条件ではあるかもしれないが、決して十分条件ではないからだ。

では、単なる「物知り」と「教養人」の違いはどこにあるのだろうか。おそらく両者を隔てる決定的な一線は、さまざまな知識をただばらばらの断片として所有しているだけなのか、それともそれらを相互に関連づけ、一貫した思考の体系（これを個別的な「知識」と区別する意味で、仮に「知」と呼んでおこう）へと統合できる能力をそなえているのか、という点にある。なにかを知っているということは、それだけではなにごとを意味するわけでもなく、せいぜい「そんなことまでよくご存知ですね」と感心される程度のことにしか役に立たない。しかしそれが「知」を構築する要素として有機的に組み込まれ、いつでも適切な仕方で動員されうる状態にまで(ウ)昇華されるに至ったとき、人は単なる「物知り」ではない「教養人」として振舞うことができるようになる。

ところでこのように定義された「教養人」は、断片的な知識を体系的な知へと構造化するための「軸」をもっていなければならない。それはべつにいわゆる学問である必要はなく、仕事の上でのノウハウであってもなんでもいいのだが、とにかく「これが自分の拠って立つ場である」といえるような固有の基盤、それを中心としてもろもろの情報が凝集され統合される専門性の「核」を保有していなければならない。そうでなければ、せっかくの豊富な知識もすべてが均等な重みで並列されているだけで、相互に連動することのない寄せ集めの集合体にとどまってしまうからだ。要するに、教養人はまず専門人でなければならないのである。

いや、それはおかしい、順序が逆ではないか、と思われた方も少なくあるまい。最初から狭い枠に閉じこもらず、いろいろな勉強をして(エ)俯瞰的な視野を培うことこそが「教養」の本質なのではないか。なんらかの専門性を身につける前に、まずはさまざまな分野の知識を万遍なく獲得することを、ふつうは「教養」と呼ぶのではないか。だから「(あ)」というのが正しい言い方なのではないか。一般的な了解としてはその通りである。また、筆者の大学の教育システムもこうした理念のもとに構築されている。つまり入学後すぐに専門分野を決めるのではなく、すべての新生がまず教養学部^カに所属し、そこで幅広い教養教育を受けてから自分の能力や適性に応じた進路を選択するというシステムが、良き伝統として長年受け継がれているのである。この方式は「遅い専門化」と呼ばれている。

しかし、良し悪しは別として、またそれが正しい判断であるかどうかは留保するとして、早くから自分の進むべき道を決めている者がいるのは当然であるから、(a)そうした学生にまで「遅い専門化」を強要するのが果たして合理的といえるかどうかは、確かに疑問なしとしない。特定の分野に強い関心と高い能力をもつ学生にたいしては、思い切って早いうちから専門的に勉強にうちこむ機会を提供する、すなわち「早い専門化」の道を開くのも、大学として果たすべき使命のひとつであるだろう。誰もが同じ軌道の上を同じペースで進むことが平等であるというのは、いわば一律公平幻想にすぎない。本当の平等とは、各人がそれぞれにもっとも適した（したがってたがいに同じではない）進度で、自分の意欲と能力に応じた進路を歩む権利を等しく有しているということを意味しているはずだ。

ただし、早いうちに専門化した学生が他分野のことをほとんど勉強しないまま卒業してしまうと、かなりの確率で「無教養な専門バカ」になる恐れがある。だからそうならないようにするためには、やはりどこかの段階で教養教育を受けることが不可欠だろう。ただしそれは従来のいわゆる「一般教養」、すなわち理系の人間でも日本の歴史のことを知っていなければいけないとか、文系の人間でもITの基礎知識は必要であるとかいった意味での教養教育とは、(オ)おのずから性格を異にする。

このステージで必要なのは、ある程度専門教育を経た段階でこそなされるべき教養教育、各自の専門性が確立されつつある段階でこそ意味をもつような教養教育である。自分の軸となる専門分野をいったん広い学問的な(カ)見取り図の中に置き直し、他のさまざまな分野との関係の中で相対化し、さらにはある課題を前にしたとき、それが他の分野とどのように連携協力できるのかを考えさせるような教育——本書で「後期教養教育」と呼ばれているのは、このように定義されるものにほかならない。「遅い専門化」との対比において、これを「（ い ）」と呼ぶこともできるだろう。

考えてみれば（あるいは考えてみるまでもなく）、「教養教育」と「専門教育」は本来、前後関係にあるものではないし、ましてや上下関係にあるものではない。両者は車の両輪のごとく、同時並行的に、かつ対等の重みをもって実施されてはじめて効果を十全に発揮するはずである。「後期教養教育」は、それゆえ大学の1・2年生よりも、むしろ3・4年生を対象としたものとして、さらには大学院生や社会人までも(キ)射程に入れたものとして構想されなければならない。自分の「軸」や「核」がある程度固まってきた人間にとってこそ、異分野との対話を通してこれを疑問に付し、他者に向かって開き、場合によっては根底から組み直すことが必要だからである。こうしたプロセスを経てはじめて、私たちは断片的な「知識」を構造化して体系的な「知」へと織り上げることができるだろう。(b)教養人はまず専門人でなければならないゆえんである。

（石井洋二郎、藤垣裕子『大人になるためのリベラルアーツ』東京大学出版会、2016。文章を一部改変してある。）

問 1. 本文中の下線部 (ア) ～ (キ) の本文中における意味に最も近い語を次の選択肢から選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄にマークしなさい。ただし、(ア) (イ) (ウ) (エ) (オ) (カ) (キ) である。なお、同じ選択肢は 2 回以上使わないこと。

- | | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|-----------------------|
| 11 射かける | 12 一般的 | 13 うつろで | 14 変えられる | 15 確實 |
| 16 課題 | 17 悲しく | 18 気化される | 19 気まぐれな | 20 結果 |
| 21 定めた | 22 下絵 | 23 自立的に | 24 せいぜい | 25 体系 |
| 26 対象 | 27 退廃的 | 28 高められる | 29 断定的に | 30 鳥瞰 ^{かん} 的 |
| 31 当然のように | 32 排除しない | 33 豊富 | 34 含めた | 35 全く |

問 2. 教養人の条件として最も適切なものを次の選択肢から選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄 にマークしなさい。

- 1 早い時期から高い専門性を身につけた意欲のある人
- 2 さまざまなことを幅広く知っており、どんな話題にも合わせられるだけの知識を備えている人
- 3 広い知識を持つと同時に、それらを構造化して体系的な知へと統合できる人
- 4 複数の分野にまたがるバランスのとれた知識を持っている人

問 3. 本文中の下線部 (a) に最も近い内容の文章を次の選択肢から選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄 にマークしなさい。

- 1 自分の進むべき道を早くから決めている者には早くから専門性の高い教育を提供する、というのは正しいことである。
- 2 優秀な学生にまで「遅い専門化」を強要するのは妥当ではない。
- 3 特定の分野に強い関心と高い能力をもつ学生に対して、早くから深い教養を身につけさせるのは合理的である。
- 4 早く専門的な勉強がしたい学生にも、まずは幅広い教養教育を受けさせ、その後に専門について深く学ぶというやり方は常に合理的とは言えない。

問 4. 本文中の空欄 (あ) に入る最も適切な語句を解答用紙 B の所定の欄に 20 字以内で書きなさい。

問 5. 本文中の空欄 (い) に入る最も適切な語句を解答用紙 B の所定の欄に 5 字で書きなさい。

問 6. 本文中の下線部 (b) のように著者が主張している理由は何か。次の文中の空欄 (う) と (え) に最も適切な語句を考え、解答用紙 B の所定の欄にそれぞれ 25 字以内で書きなさい。

教養人になるためには (う) 後に、(え) 必要があるから。

Ⅱ．以下の文章を読んで、次の問1～問6に答えなさい。

一般には次の三つの主要な規準が満たされて初めて、ある出来事が別の出来事の原因である、つまり両者に因果関係があると判断できる。それは、① 出来事の共変、② 時間的順序関係、③ もっともらしい他の原因の排除、の三つである。これら三つの規準のすべてが満たされていることを証明しない限り、因果関係を確定することはできない。しかし、多くの場合、人々はこれら三つの規準について十分に考慮しないままに原因の推測を行っているのである。

共変の原則とは、出来事 X が出来事 Y の原因であるならば、出来事 X と出来事 Y は一緒に（共に）変化しなければならないということである。つまり一方の観測値なり、得点なり、状態なりが変われば、他方も変わらなければならない。このような二つの関連した変化は「(17) (18)」しているともいうし、科学的な用語では「相関している」と表現する。この相関関係にある二つの観測値は、必ず共に変化しているが、その変化の方向性はどちら向きでもよい。つまり片方の状態が上昇したのに対し、もう片方は上昇することもあるし、逆に下降することもあるということである。試験勉強にかける時間を多くすれば、おそらく共変して試験での正答数は上昇するだろう。また、多く勉強すればするほど、共変して解答に要する時間は短くなるだろう。(19) (20) 相関関係であって、重要なのは一方が変化する時に、他方も変化するという点である。

二つの出来事の間共変のありようは、統計的に測定して表現することが可能である。こうして数値的に測定・表現された共変を特に相関と呼ぶ。相関を表現するためには、相関の「(21) (22)」と「(23) (24)」の二つを考えなければならない。相関の (21) (22) とは、X がどれくらい変化したかを知ることで、どれくらい Y の変化を正しく予測できるのか、その程度を表現したものと考えてよい。関係が強いほど、片方の変化からもう一方の変化の予測可能性が高くなるのだ。次に相関の (23) (24) について説明しよう。二つの測定値があった時、一方の値が高くなると他方の値も高くなり、逆に一方が低ければ他方も低いような場合、その両者の関係の方向は「正」とであると表現する。それに対して、両者の関係が方向的に逆の場合には「負」と表現する。

因果関係を証明するための第二の規準である時間的順序関係とは、もし X が Y の原因であるならば、X が Y より時間的に先に起こっていなければならないという、一見すると極めて単純な規準である。この考え方はあたりまえといえばあたりまえなので、異論の入り込む余地などないように思えるが、実はそうではない。時間的順序関係が見た目ほど単純でないケースもあるのだ。仮にしつけの方法と子どもの性格に関する次のような心理学の研究が発表されたとして考えてみよう。この研究では、「体罰などの厳しいしつけを行う親に育てられた子どもは、体罰を用いない親に育てられた子どもに比べて、性格的により攻撃的な傾向がみられる」という結果が示されている。あなたはおそらく時間的順序関係の原則から、① 体罰が用いられ→② その結果子どもが攻撃的な性格に育ってしまった、と考えるだろう。体罰を用いるしつけと子どもの攻撃性は共変しているし、時間的には明らかにしつけが前なのだから、因果関係の立証に必要な規準のうち、共変と時間的順序関係の二つは満たされているようにみえる。

しかし、このケースでは共変は確かであっても、時間的順序関係については別の (25) (26) もあるのではないだろうか。たとえば、子どもの攻撃性が生まれつき異なっていて、攻撃性が強くて言うことを聞かない子どもを育てる親は、ついつい厳しいしつけ態度をもつようになり、時には体罰にさえ訴えるようになったと解釈することも可能なのである。もちろん、絶対にこちらの解釈の方が正しいといっているわけではない。ただ、(25) (26) として、攻撃性の方がしつけよりも時間的に先行して生じていたことも考えられるということだ。このように複雑な事態では時間的順序関係は、必ずしも一見した通りとは限らないのである。このような順序関係が混乱してしまう話として「(あ)」というおなじみの

問題をあなたも知っているであろう。われわれが因果関係を推論するときには、出来事 X が出来事 Y よりも本当に時間的に先行しているのか、逆の (25) (26) はないのか、といった点を論理的に考えてみなければならない。

因果関係を立証するための第三の規準であるもっともらしい他の原因の排除は、前の二つの規準に比べて、最も確認が困難な規準である。この規準は、出来事 X が Y の原因と考えられ、さらにこの出来事 X 以外に Y を「 (27) (28) 」説明できるものが何も存在しない時にのみ、X が Y の原因であると認められるというものである。これは第三変数の問題とも呼ばれ、因果関係を考える上で最もクリティカルな思考力が必要とされる問題である。

二つの出来事 X と Y に共変関係がある時、われわれはとかく目の前の状況にのみ注目して、X と Y の間でだけで因果関係を判断してしまいがちである。しかし、(a) 実際には背後に隠れている第三の変数 Z が X と Y の両方の原因として関係している場合もよくあるのだ。

第三変数を考慮することによって、因果関係が理解しやすくなる場合もあるが、一方で単純に見えていた因果関係が非常に複雑になってくる場合もある。その例として、かつて行われた「喫煙は有害かどうか」に関する議論を取り上げてみよう。長年にわたり多くの人が、喫煙は呼吸器系の病気や障害の原因になることを主張してきた。事実、タバコを吸う人は吸わない人に比べて呼吸器の問題をかかえるようになる傾向が大きい。つまり、喫煙と病気の間に共変が存在することはわかっていた。さらに、われわれの知る限りでは、病気が喫煙より先に起こると論じた者は一人もいない。ということは、因果関係を立証するための二つの規準、つまり共変と時間順序が証明されているように見える。よってタバコは病気の原因であると主張されるようになったのだ。

しかしタバコ産業の関係者がこれに異議を唱えた。彼らは、これらの証拠は必ずしも喫煙が健康を害する原因であることを意味しないと主張した。なぜなら第三の変数、すなわち喫煙と病気の双方を引き起こすような他の要因が他に考えられるからだという。要するに因果関係を証明する第三の規準が満たされないのだ。彼らがその要因の一つとして可能性を指摘したのがストレスである。ストレスが多い人は病気になりやすく、また同時に、ストレスが多い人は喫煙量が多くなるということは十分に考えられる。もしそうなら、喫煙と病気の間の因果関係と見えていたものは、実際には第三の要因であるストレスと他の二つの要因を巻き込んだ因果関係ということになる。

喫煙と病気の問題に関しては長い間さまざまな議論が行われてきたが、そこで検討された喫煙の危険性を示す証拠は、この第三変数の可能性が排除されていないものがほとんどであった。このような証拠に立脚している限り、(b) たとえ喫煙と病気の共変関係が立証されたとしても、それだけで完璧な因果関係を主張するには不十分なのである。繰り返すが、共変は必ずしも因果関係を意味しないのだ。

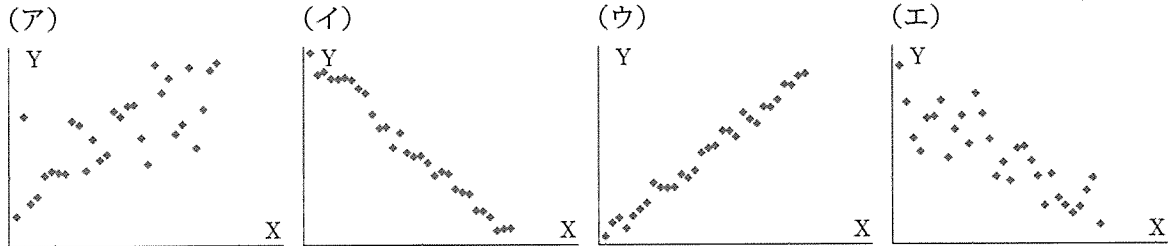
(E. B. ゼックミスタ, J. E. ジョンソン著『クリティカルシンキング《入門篇》』宮元博章, 道田泰司, 谷口高士, 菊池聡記, 北大路書房, 1996。文章を一部改変してある。)

問 1. 本文中の空欄 (17) (18) ～ (27) (28) にあてはまる最も適切なものを次の選択肢から選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄 (17) (18) ～ (27) (28) にそれぞれマークしなさい。なお、同じ選択肢は 2 回以上使わないこと。

- | | | | | |
|---------|---------|----------|--------|-------|
| 11 いずれも | 12 片方は | 13 可能性 | 14 共調 | 15 共変 |
| 16 強力な | 17 合法的に | 18 合理的に | 19 主観 | 20 正解 |
| 21 説明 | 22 総合的に | 23 相対 | 24 強さ | 25 独立 |
| 26 並行 | 27 方向 | 28 見せかけの | 29 明確に | 30 問題 |

問 2. (ア) ～ (エ) の図は共変関係を表している。それぞれの図を説明するものとして、次の中から最も適切なものを選び、解答用紙 A (マークシート) の解答欄にマークしなさい。ただし、(ア) (イ) (ウ) (エ) である。なお、同じ選択肢は 2 回以上使わないこと。

- | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|----------|
| 1 強い正の相関 | 2 弱い正の相関 | 3 強い負の相関 | 4 弱い負の相関 |
| 5 X は Y の強い正の原因 | 6 X は Y の弱い正の原因 | 7 X は Y の強い負の原因 | |
| 8 X は Y の弱い負の原因 | | | |



問 3. 本文中の空欄 (あ) に入る最も適切な文章を次の選択肢から選び、解答用紙 A (マークシート) の解答欄 にマークしなさい。

- | | |
|---|---|
| 1 青は藍より出でて藍より青し | 2 悪貨は良貨を駆逐する |
| 3 彼方 ^{あちら} を立てれば此方 ^{こちら} が立たず | 4 氏か、育ちか |
| 5 鳶 ^{とび} が鷹 ^{たか} を生む | 6 二兎 ^と を追う者は一兎 ^と をも得ず |
| 7 ニワトリが先か、卵が先か | 8 火の無い所に煙はたたぬ |

問 4. 本文中の下線部 (a) にある、第三の変数を考慮した因果関係の説明として最も適切なものを次の選択肢から選び、解答用紙 A (マークシート) の解答欄 にマークしなさい。

- 子どもが暴力的なテレビ番組をみたため攻撃的な性格になるという説があるが、攻撃的な性格であるため子どもが暴力的な番組を好んでみるという説明もできる。
- 忘れ物の多い人は試験の成績も悪い傾向にあるが、これは不注意な性格が原因だと考えられる。
- 喫煙は、喫煙者本人のみならず、周囲の非喫煙者への悪影響が問題である。
- 相関関係があるとされている事例には、観察者の思い込みによる相関の錯覚にすぎないものがある。

問 5. 社交性と友達のできやすさには相関があるとする。このとき、これら二つの事項間の因果関係として、「社交性がないため、友達ができにくい」という説明が考えられる。これに対し、時間的順序関係の点に注目した別の因果関係を考え、解答用紙 B の所定の欄に 25 字以内で書きなさい。

問 6. 本文中の下線部 (b) について、喫煙が病気の原因であることを主張するには、共変関係以外に何を立証する必要があるか。著者の考えに沿って解答用紙 B の所定の欄に 40 字以内で書きなさい。